

## 2. 新町・古町地区の歴史と町並みと建築的特徴について

城下町としての熊本は、応仁、文明年間（1467 - 1487）の千葉城から明応年間（1492 - 1501）の隈本城にはじまります。その後、新町・古町のある城下町は、加藤清正の熊本城の築城とともに建設に着手され、それから細川藩時代の文化的蓄積の時代を過ごし、明治に入り西南の役や戦災などによる焼失を経て、商業地と住宅地とが混在する現在の姿になっています。かつてはその大部分が木造瓦葺の建物でしたが、明治大正期には金属葺きの洋館も建設され、また昭和になると鉄筋コンクリート造の建物が登場し、戦後の高度経済成長期を境に（関連法が整備され）急速に都市化と不燃化が進みました。

### ◆古町の歴史と町並み

熊本市の町屋を地域的にみると、古町地区、新町地区、坪井地区、出町・京町地区、及び迎町地区の5地区に集中的に分布しており、この中で古町は、最も早い時期に建設が始められました。細工町、唐人町、呉服町の一部あたりでは、清正の築城以前、天正年間の終わりの頃には既に町があったとも伝えられています。蛇行する白川・坪井川の改修が行われ、一辺120mの碁盤目状の一町一寺の町割に整備されました。

古町は、町人町として建設され、細工町、呉服町、鍛冶屋町、大工町など職名が記され、町名に由来する様々な商品を扱う店が並びました。建設当時から物資流通の動脈である坪井川の舟運が利用されていましたが、明治24年の九州鉄道開通、大正13年の市電開通により、ますます流通の拠点性が高まりました。

大正14年に行われた国産共進会（熊本市三大事業記念博覧会）を機に、その会場となった二十三連隊跡地（市役所南～旧産業文化会館一帯）は、市街地整備によって機能集積が進み、都心は新市街へと移りました。昭和5年、紺屋町（現在の商工会議所）にハ木デパートが開業するものの同13年に閉店し、以後は問屋街としての性格が強まります。その後は自動車交通の発達や郊外の流通業務団地開発に伴い既存企業が移転し、跡地にマンション建設が進むなどして、現在に至ります。



大正時代の唐人町筋 大正14年撮影 提供：富重写真所



明十橋付近から見た坪井川下流 明治中期撮影 提供：富重写真所

## ◆新町の歴史と町並み

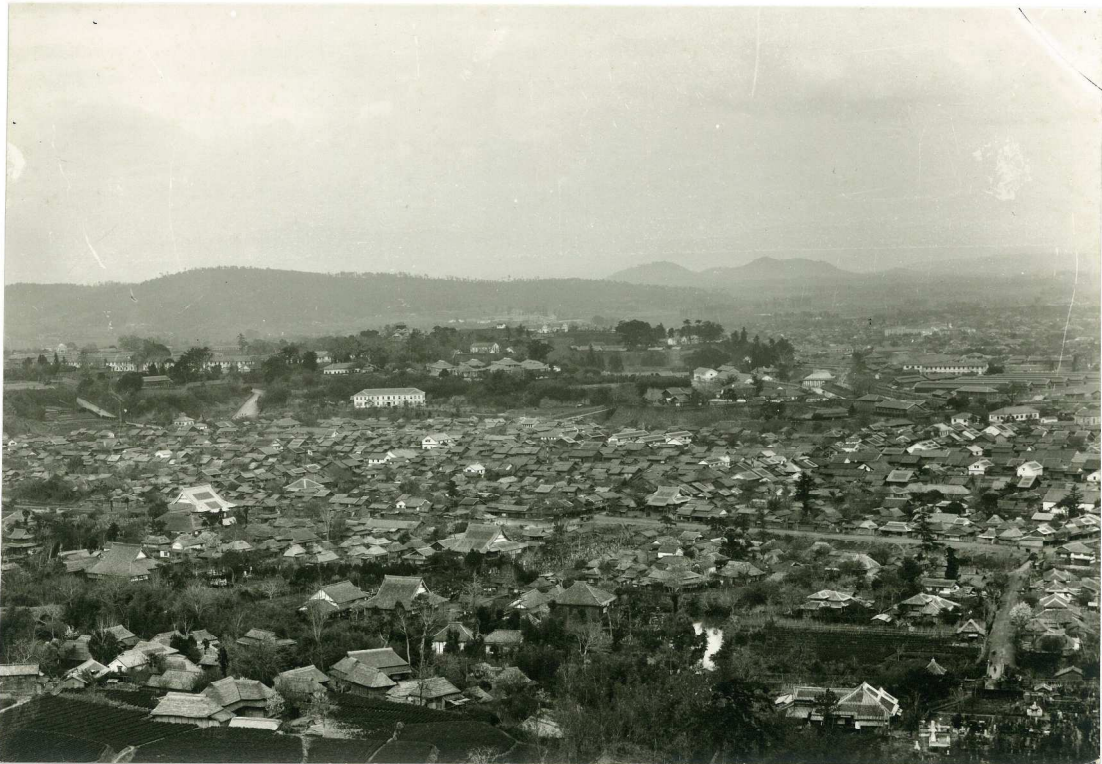
新町は、古町の次に建設されたとされ、熊本城から諸国へ通じる4つの街道の起点である「元標」を擁する熊本城の玄関口にあたる町でした。町全体が堀と坪井川で囲まれ、四方を新一丁目門、新三丁目門、高麗門等の堅牢な櫓門で固められていました。

新町の町割は、約120m×60mの南北に長い短冊形の街区で構成され、南北の通りには見通しが利かないように各所にクランクがつくられ、防衛性が高められています。また、その短冊形の街区の中は、間口が狭く奥行きが深い敷地が並び、武家屋敷と町屋<sup>(1)(3)(11)</sup>が配置されていました。

明治10年の西南の役において、新町・古町は激戦地となり、町の多くを焼失しました。西南の役後、古町では以前の町並みが建てられ、新町では県会議事所、警察、区役所、熊本郵便役所などの主要施設が建てられ、卸・小売業、料亭、通りには朝市などが立ち、熊本の中心として賑わいを見せるようになりました。明治24年の鉄道の敷設によって町の西側の堀が埋め立てられ、昭和4年には市電の開通によって道路が拡張され、電車通りが新町の主要な通りとなりました。その後、昭和40年代に入ると市場が田崎へ移転するに伴って卸・小売業が減少し、加えて製造業・事務所も移転が目立つようになりました。そして、その移転後の跡地にマンションの建設が進んでいきました。

### 参考文献

- (1) 熊本の町並み（「熊本市の町屋」福原昌明）／財団法人 熊本開発研究センター
- (3) 古写真に探る熊本城と城下町／富田絃一／肥後上代文化研究会
- (11) 熊本の家と暮らし／石井清喜



花岡山から熊本城への眺望 明治27年撮影 提供：富重写真所



坪井川下流から見た洗馬橋付近 明治中期撮影 提供：富重写真所

## ◆現代における新町・古町の町並み

現在の新町・古町は、都心にあることから共同住宅が建ち並ぶ町並みになりつつあります。銀行や卸問屋・病院跡地などに大型マンションが建設され、町並みは大きく変化しました。町屋が取り壊された跡の小規模コインパーキングや道路沿いに駐車スペースを設ける住宅への建替えなどにより、町並みが途切れているところも少なくありません。また、古くからの住民が営む店舗が閉店し、空き店舗となるケースも増えており、町並みの変化は地区の活気の減少と大きく関係しています。

一方、唐人町通りでは旧第一銀行が解体を免れ、再生されるなど、歴史のある町並みを後世に伝えていこうという努力が、実を結んでいるケースもあります。また、吉田松花堂や中職人町通りなど当時の姿を残している場所もあり、町のシンボルとして地域の人々に愛着を持たれています。



新町 中職人町



新町 新鳥町



古町 呉服町二丁目

## ◆新町・古町の町並みとその建築的特徴

現状の新町・古町地区の町並みを理解する上で、その基準的な線となっている町割（区画）とそこに建てられた町屋の特徴について次のように整理します。

### ❖古町の町割

熊本城の南部に位置する古町は、その街区の1辺がほぼ120mの正方形が整然と碁盤の目状に区画されています。その特徴は、街区の中央部分に寺院が配置され、1町1寺制が地図上にも視覚的にはっきりと確認できることです。寺院は通りより引き込んだ位置にあり、通りには山門だけが見え、本堂の大きな瓦屋根が低い町屋の屋根越しに見えている景観となっています。また、通りに面した山門から本堂に向かって抜けていく視線もこの町らしい景観といえます。

### ❖新町の町割

これに対して新町は、南北に長い短冊状の街区で構成されています。短辺が60～70m程度であるのに対し、長辺は100～200m程度となっています。なぜ、そのような町割にしたかは定かではありませんが、正方形に近い（古町型）の町割りを京のような中世型、長方形に近い（新町型）の町割りを江戸のような近世型とする学説もあります。間口の長さで税額が増える仕組みであった当時は、間口に対して奥行きの深い町屋が多く、そうした土地利用の形態から考えると、長方形の近世型の方が中央部の空き地解消に有効であったと考えられています。

### ❖お城と城下町

熊本城下の場合も、先に建設された古町は、城の南側を守る位置にあり、白川を越えてくる敵を防ぐ防衛線の意味をもったことから、寺を中心とした古町地区全体が防衛拠点として機能するように配慮されていたと言えるでしょう。それに対して新町は、古町との境を流れる坪井川に一定の防衛機能が期待できることなどから防衛拠点としての性格は薄く、効率的な土地利用を優先して町割りが決められたと想像できます。古町と新町が形成された時間差や、その担う役割の違いがそのまま町割りにも反映しています。



肥後国熊本城廻絵図  
／古町部分（江戸初期）



肥後国熊本城廻絵図  
／新町部分（江戸初期）



本堂へのアプローチ／古町



本堂の屋根と町屋／古町



坪井川／明十橋から明八橋方面



## ❖建築的特徴 その1 町屋の平面構成

新町・古町は、熊本藩の中でも最大の市街地であったことから間口が10間を超える大店（おおたな）も散見されます。間口が小さいものの中には1.5間程度のものもあり、平均すると3間前後のものが多くなっています。それに対して奥行きは15～18間ほどあり間口の3倍から10倍ほどになるケースが多くなっています。そのほとんどが職住一体型の住居で、表側に店舗や接待のための座敷があり、中庭を隔てて離れや蔵を配置する平面構成を取ることが通常です。これは、全国的に見られる町屋の特徴とも言えますが、新町・古町の特徴としては「通り庭」の幅と位置が挙げられます。通り側の表と奥を結ぶ通路空間である「通り庭」は新町・古町では半間幅のものが多く、純粹な通路として考えられていますが、他地方の町並みでは、例えば京都市内などでは台所空間と兼用し多機能な空間とするために幅広く取ることが多くなっています。<sup>(1)</sup>また、その位置については、（特に新町において）東西軸の建物では南側に、南北軸の建物では西側にとることが多く、西風が吹く熊本の気候の影響か、もしくは仏壇や神棚の位置などとの関連が指摘されています。



3間間口／古町



通り庭／新町

### 参考文献

- (1) 熊本の町並み（「熊本市の町屋」福原昌明）／財団法人 熊本開発研究センター

## ❖建築的特徴 その2 町屋の外観構成

新町・古町ともに通りに対して「平入り」の建物が圧倒的に多く、商人町の名残をとどめています。また、粘土瓦を白い油漆喰で固めた勾配屋根が隣の屋根より高くなったり、低くなったりと不規則に繰り返えされながら連続し、町並みのスカイラインを形づくっていたと考えられます。その屋根面の一つ一つは、土葺き棧瓦の黒と白漆喰の白との対比と、それによって強調される立体感が風情を生み出していますが、現代的な瓦の葺き方（引掛棧瓦）では陰影の乏しい平坦な面となっています。

また、屋根廻りの細部を見てみると、1階部分は木部を露出しているのに対して、2階部分は漆喰を塗りまわして塗籠めるケースが多くなります。古町については、2階の妻側の外壁を漆喰塗籠めをしている建物が圧倒的に多くなっています。また、外壁については新町で真壁にした家が多いですが、古町の方では大壁にした方が多くなっています。その漆喰についても白ばかりでなく黒漆喰や灰漆喰が用いられており、屋根瓦の灰色系の色と相まって、白と黒の無彩色のバリエーションが色彩的に新町・古町の色彩のベースとなっていたと考えられます。

窓や戸口には木製の格子がいまでも見られますが、アルミサッシへの更新などにより、木製建具・格子は少なくなっています。



平入りの町並み／新町



粘土瓦に油漆喰／古町



木製格子と木製建具  
／古町